いじめに対する潜在的選好の測定の試み

—中学生を対象とした IAT を用いて—

○藤井勉¹ 澤田匡人²

(¹長崎大学 ²宇都宮大学)

Key words: いじめ, 潜在的選好, Implicit Association Test

目 的

平成 25 年 9 月に施行された「いじめ対策推進法」の第 7 条および 8 条では、学校の設置者、学校及び学校の教職員の責務が明記されており、これまで以上に教育現場での対応が求められている。近年の「いじめ」のフィールドは、学校だけに限らない。インターネットを通じて行われる「ネットいじめ」の問題も深刻化している。ネットいじめは、ある程度の専門的な技術が必要であり、関節的で見えにくく、逃げるのが難しいなどの点で、従来型はいじめとの違いが指摘されている (Smith, 2015)。

ネットいじめの例には、同じ生徒児童の悪口を SNS に流す、同じクラスの生徒を同じ SNS のグループに入れないなどがあり、平成 25 年度の調査では、いじめ認知件数のうち 8.9% (303 件) がネットいじめであった (文部科学省, 2013)。

いじめの実態に関するこうした調査は、質問紙や面接が中心である。しかし、加害者が自らいじめを認めるとは考えにくく、被害者自身がいじめを認知している周辺の者も、不用意にそれを報告することが躊躇われる場合もあるだろう。したがって、自己報告型の質問紙は、必ずしもいじめ発見のために有効な手段とはなりえないケースも考えられる。

そこで本研究では、反応時間ベースの測定法である Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) の使用を提案する。潮村 (2008) によれば、IAT は社会的望ましさの影響を受けずに態度やパーソナリティを測定可能であり、十分な信頼性・妥当性を有するとともに、個人差の測定にも十分に敏感である。McConnell & Leibold (2001) は、この IAT を用いて人種 (白人・黒人) への態度を測定し、黒人に対してネガティブな態度を持つ参加者ほど、黒人の実験者と距離をおいて座るという結果を示した (この行動は質問紙で測定した態度からは予測されなかった)。

IAT はコンピュータを用いて実施することが多いが、環境面の制約がある場合などのために、紙筆版も提案されている (e.g., 藤井, 2009; 岡部・木島・佐藤・山下・丹治, 2004)。紙筆版はキー押しではなく、紙面上のチェックボックスに印をつけて刺激語を分類するものであり、コンピュータを用意できない環境でも実施可能である。また、採点方法もマニュアル化されているなど (潮村, 2015)、いくつかの利点がある。

本研究はネットいじめに焦点を当て、ネットいじめを行っている友人の多さと、調査対象者のネットいじめ加担経験の関連を検討する。また、上述の IAT を用いて、ネットいじめ加担経験への潜在的態度の影響を検討する。潜在的態度の影響については探索的であるが、先行研究を踏まえれば、いじめへの加担経験を首尾よく予測する可能性があると思われる。

方 法

参加者 関東地方の中学生 205 名 (男子 102 名, 女子 103 名) が参加した。ただし、いじめ IAT においてエラー数が 20% を超えた 42 名を除いたため、分析対象者は 163 名であった。

材料 いじめ IAT (刺激語の収集などの予備調査を経て作成)、いじめ容認態度 (神藤・齋藤, 2001) より「いじめ軽視」「いじめ必要論」(各 4 項目・5 件法, 1: 反対—5: 賛成)、ネットいじめをする友人の多さ (2 項目・4 件法, 1: だれもい

ない—4: 4 人以上)、ネットいじめ加担経験 (Kanetsuna & Sawada, 2015; 4 項目・2 件法, 0: ない—1: ある) の各尺度を使用した。

手続き 各学級の担任教員の指示のもと、参加者に対していじめ IAT および各尺度への回答を求めた。いじめ IAT の実施に際しては、担任教員用のマニュアルを作成し、協力教員に対して十分な説明も行った。

結 果

ネットいじめへの加担経験を従属変数とし、step1 で性 (統制変数) および IAT 得点、ネットいじめをする友人の多さを投入し、step2 で IAT 得点とネットいじめをする友人の多さの交互作用項を投入した階層的重回帰分析を実施した。また同様に、IAT 得点をいじめ軽視、いじめ必要論に置き換えた分析も実施した。まず、1st step で投入した IAT 得点は正の影響が有意傾向 ($b = .14, p < .10$) であり、ネットいじめをする友人の多さの影響は有意 ($b = .38, p < .01$) であった。また、性の影響はみられなかった。次に、2nd step で投入した IAT 得点×ネットいじめをする友人の多さの交互作用項の影響が有意であったため ($b = .28, p < .01$)、単純傾斜の検定を行った。その結果、いじめ IAT 得点が高い場合 (+1SD)、ネットいじめを行う友人が多いほど (+1SD) ネットいじめの加担経験が多かった ($b = .50, p < .01$; 図 1)。このような交互作用は顕在的態度 (いじめ軽視・いじめ必要論) ではみられなかった。

図 1 いじめ IAT と友人の多さがいじめ加担経験に及ぼす影響。

考 察

ネットいじめへの加担経験に対してネットいじめを行う友人の多さが正の影響を及ぼしており、ネットいじめを行う友人が多いほど、当人もいじめに加担しやすくなることが示された。次に、IAT 得点とネットいじめをする友人の多さの交互作用が検出された。このことは、ネットいじめを行う友人の多さの影響だけでなく、IAT で測定したいじめへの潜在的態度との組み合わせの影響を示している。

今後は、こうしたいじめへの潜在的態度はいつ形成されるのかという発達の視点や、いじめへの潜在的態度は変容しうるのかという実験的な視点からの更なる検討を要する。

(Tsutomu FUJII, Masato SAWADA)

本研究の一部は科研費 (基盤 C, #26380867) の助成を受けた。